

シラファイから白老町への変遷と連続性 —北海道をかたちづくるアイヌの集落—

2019.11.08

卒論発表

東野友紀

目次

【序論】
第0章 本研究について
0-1はじめに
0-2研究の動機・背景
0-3研究の目的
0-4研究の方法
0-5本研究の基礎情報
0-5-1アイヌ文化について
0-5-2北海道に移った本州の人々について
0-6既往研究
【本論】
第1章 先史時代からアイヌ文化成立へ
1-1はじめに
1-2続縄文時代
1-3擦文・オホーツク文化時代
1-3-1擦文文化
1-3-2オホーツク文化
1-4小結
第2章 アイヌ成立以降のコタンの変化
2-1はじめに
2-2アイヌ文化時代のコタンの分類
2-3自然コタン時代
2-4強制コタン時代
2-5保護コタン時代
2-6小結
第3章 調査地白老町に関して
3-1はじめに
3-2白老町の概略
3-3調査地選定理由
3-4文献から見るシラファイコタン
3-4-1松浦武四郎資料から見る江戸後期のシラファイコタン
3-4-2イザベラバード『日本奥地紀行』から見る明治期のシラファイコタン
3-4-3写真に収められた1940年代のシラファイコタン
3-5小結
第4章 現地調査から見る白老
4-1はじめに
4-2現地調査の方法
4-3遺跡の立地から見る居住地の変遷
4-3-1白老町内の遺跡プロット
4-3-2遺跡の立地と現在
4-4アイヌ・和人の居住地の変遷
4-4-1白老町内のかつてのコタン
4-4-2白老におけるアイヌ・和人の居住地の変遷
4-5小結
第5章 考察
5-1はじめに
5-2アイヌの成立と変容
5-3白老アイヌの変遷
第6章 結論
結論
謝辞
参考文献
図版出典

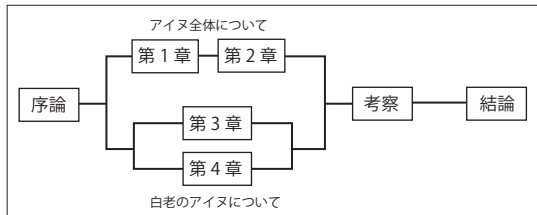


図1:論文構成

【序論】

研究の動機・背景

アイヌ民族は本州の稲作を中心とした農耕民族である我々の文化とは根本的に異なっている。北方世界の交流の中で続縄文・擦文文化・オホーツク文化 などの異なる系譜を辿り、狩猟民族としての文化や生活基盤を築いてきた。しかし、アイヌ民族が文字を持たない民族であったことや、江戸時代の松前藩や明治時代以降の政府による無慈悲な開拓政策や日本の近代化に巻き込まれていく形で、その文化は少しずつ失われていった。アイヌの人々が今まで辿ってきた道のりが決して容易なものではなかったことは想像に難くない。そこで今までの困難な状況下において、彼らは独自の文化をどのように継承してきたのかという点に関して、興味を持った。本研究を通してアイヌの集落の変遷をたどり、我々本州の人間とアイヌの関係性を考えることによって、異なる価値観を持った民族の共生の形を見出すための足掛かりになればと思う。

研究の目的

- ①アイヌ文化の成立以前の文化を追うことでアイヌとはどんな民族で文化の形成にあたって何を取捨選択してきたのかを明らかにする
- ②農耕民族の我々とは異なる原理をもつ狩猟採集民アイヌの集落について、その立地条件を明らかにすることでアイヌ民族の集落の構造とその変遷について考察する
- ③本州の人々と関わっていく中で、アイヌの人々がどこに住み、どう集落を存続させてきたのか、またそれが現在の北海道の都市の中にどのように影響しているのかについて考察する

研究の方法

- | | | |
|-----|---|------|
| 第1章 | } | 文献調査 |
| 第2章 | | |
| 第3章 | | |
| 第4章 | … | 実地調査 |
| 第5章 | … | 考察 |

既往研究

- アイヌの集落コタンについて
 - ・小林和夫「アイヌの季節性の集落、すなわち季節コタンについて」、「コタンとその立地」季節性のアイヌの集落、夏のサクコタンと冬のマタコタンについての史料をまとめることによって、実際の季節コタンの姿について考察している。また、サクコタンとマタコタンについて当時のコタンの立地やその理由を当時のアイヌの生活を考慮して、明らかにしようと試みている。
 - ・遠藤匡俊『アイヌと狩猟採集社会—集団の流動性に関する地理学的研究—』狩猟、採集、漁労を平均的に行っているアイヌに関して集団の空間的流動性に注目し、集落レベルの空間的流動性と家レベルの空間的流動性について統計的に史料を分析し、アイヌ社会における空間流動性のパターンとメカニズムに関して考察している。

- ・鷹部屋福平「毛民青屋集」著者がアイヌ集落を調査した際に撮った写真、簡易な平面図、簡易地図にアイヌ人名を記載した人名表を収めた私家版写真帖。
- 北方の交易について
 - ・養島栄紀『「もの」と交易の古代北方史:奈良・平安日本と北海道・アイヌ』北海道を取り巻く古代日本列島周辺の交流史、交易史に着目することで、北方産のものが古代日本の中で果たした歴史的・文化的役割について考察している。

- ・榎森進、小口雅史、澤登寛聡編『エミシ・エゾ・アイヌ』アイヌ文化の成立と変容について周辺諸人間集団との交易や交流といった観点から、近世以前の各時代における問題に関する論文を収録している。

これらの既往研究では、各時代のアイヌに関する研究は行われているものの、**現代までの連続性に関しては論じられていない**。本研究ではこれらの論の間を繋ぐことによって、**古代から現代までのアイヌの連続性を論じていく**。

【本論】

第1章 先史時代からアイヌ文化成立へ

主に日本社会との交易という観点を軸として、続縄文時代、擦文・オホーツク文化時代の生活や文化を捉えた。これによって、これらの文化圏が**狩猟採集をベースとしながら日本本土の社会を中心とした外部の文化と交流し、その中で得た技術や文化を取捨選択することで自身の文化を構成、変容させていった**ことが示された。特に**日本社会との交易の重要性が上がったことがアイヌ文化成立に大きな影響を与え、社会構成の変化を決定していった**可能性が大きいことを言及した。

第2章 アイヌ文化成立以降のコタンの変化

アイヌ文化期以降の自然コタン、強制コタン、保護コタンのコタン形式と生活の変化、またそれを引き起こしたアイヌと和人との関係性の変化について捉え、**和人の北海道に対する認識や制度が移り変わっていく中で、アイヌ文化が窮地に立たされていったことを示した**。

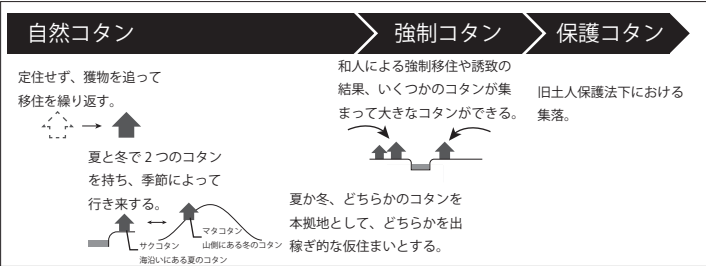


図2:コタンの変遷

変化の要因や背景を時代に沿って以下に記す。

- ・自然コタン時代において北海道における直接的な支配はあまりみられなかったが、エミシ、エゾ、夷島といった日本社会からの認識の変化によって、意識的・体制的には徐々に日本社会に取り込まれていった
- ・松前藩の成立によって現地での直接的な支配が始まった
- ・自然コタンはもともと空間的流動性があったが、和人による支配が進んでいく中で季節コタンが消滅し、強制コタンができた
- ・城下交易制→知行制→場所請負制と交易制度が変化する中で、アイヌの生活圏への浸食が進んだ
- ・幕府直轄地となった背景には、北海道を日本の土地と捉え、ロシアの南下政策を恐れたことがある
- ・大政奉還の後、日本社会の政府が新しくなると、北海道が日本の国土として開拓政策が進められた
- ・和人による法の整備によって生活・生産の場が奪われ、アイヌの和人化が進められるようになる
- ・「旧土人保護法」の下、農業をするための保護コタンができた

第3章 調査地白老町に関して

調査地を白老町に選定した理由は以下の通りである

- ①仙台北老元陣屋資料館やアイヌ民族博物館があり、**アイヌ文化に関する資料が多く残っていること**
- ②本州に近い道南に位置しているため、**かなり古くから本州との関わりがある地域であること**

また、和人による日誌など、文献中の白老に該当する部分を書き出すことで、当時の白老の生活や集落の様子を捉えた。

扱った資料は以下の通りである。

- ・松浦武四郎資料
 - 幕末から明治の探検家、松浦武四郎の蝦夷地に関する著書は特に多い。本章では『初航蝦夷日誌』、『辰手控』、『午手控』、『東 蝦夷日誌』から白老の記述を抜粋。
 - ・イザベラバード『日本奥地紀行』イギリス出身の旅行家、イザベラバードが明治11年(1878)に東京から北海道(蝦夷地)を旅行した際の記録。
 - ・1940年代の写真資料。
 - 木下清蔵『シラオイコタン—木下清蔵遺作写真集—』、掛川源一郎『gen—掛川源一郎が見た戦後北海道—』、鷹部屋福平「毛民青屋集」を扱った。
- 松浦武四郎『辰手控』より、現在の白老町と「白老里程標」を比較して作成したのが以下の図3である。この図により、地名が明記されている場所は、現在も街区となっていることが判明した。

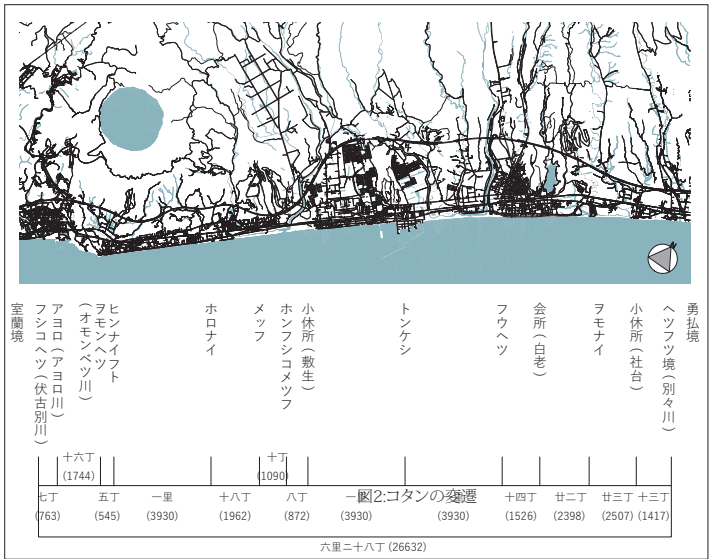


図3:白老里程標

また、人口の増減や漁場の様子から、**江戸時代からシラファイコタンがこの地域の中心地であったこと、また1940年代までは家屋や生業などの点で、伝統的なアイヌ文化が残っていたことを示した**。

第4章 現地調査から見る白老

白老に暮らすアイヌの辿ってきた変遷を古代から現代まで追うことを目的として現地調査を行った。白老町において行った実地調査は、以下の通りである。

- ①アイヌ時代以前の遺跡を調査

『新白老町史』から調査する遺跡を選定。虎杖浜では虎杖浜遺跡、アヨロ遺跡、ポンアヨロ遺跡、字白老では日の出町遺跡、ポロト遺跡、社台では社台遺跡を地図上にプロット。その後実際に現地を訪れて、立地条件と現在の環境、使われ方を確認した。

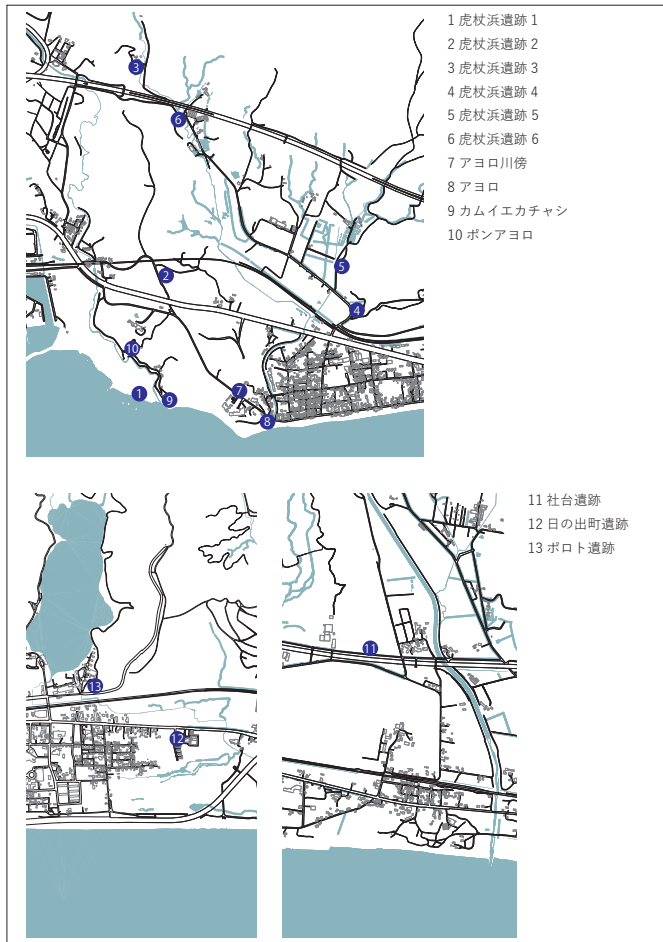


図4:白老町遺跡プロット
遺跡をプロットしたのが図4である。

調査の結果、遺跡の立地条件が川沿いもしくは海沿いの高台であることを示した。

また、山側の遺跡が荒廃していたのに対し、海沿いの遺跡は神社や灯台に転用されていること、遺跡年代の表を合わせて考え、アイヌ文化以前の人々は山側から次第に海側へと住む場所を変えていった可能性を示した。



図5:神社に転用された海沿いのアヨロ遺跡

②アイヌの人々や和人が住んでいた場所(コタン)を探す
仙台藩白老元陣屋資料館館長武永真氏へのインタビューによって各時代のアイヌや和人の居住地・中心地の変遷を明らかにし、地図上にプロットした。その後、現地を訪れ立地条件と現在の環境、使われ方を確認し、居住地・中心地が変化した要因について考察した。

以下の図6はそれを地図上に表したものである。アイヌと和人の居住地・中心地の変化とその要因を簡潔に記す。

●シラライコタン

…海川筋に位置し、よい漁場であったためアイヌの居住地になった。

●会所

…大きい漁場だったため、アイヌと交易する場として和人の商人が出稼ぎに来た。

●仙台藩元陣屋

…北法警備・アイヌ撫育のために仙台藩が陣屋を構える。

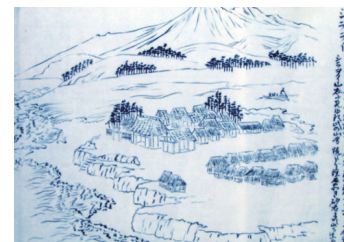


図7:松前東蝦夷地自久名尻陸地道中絵図、白老

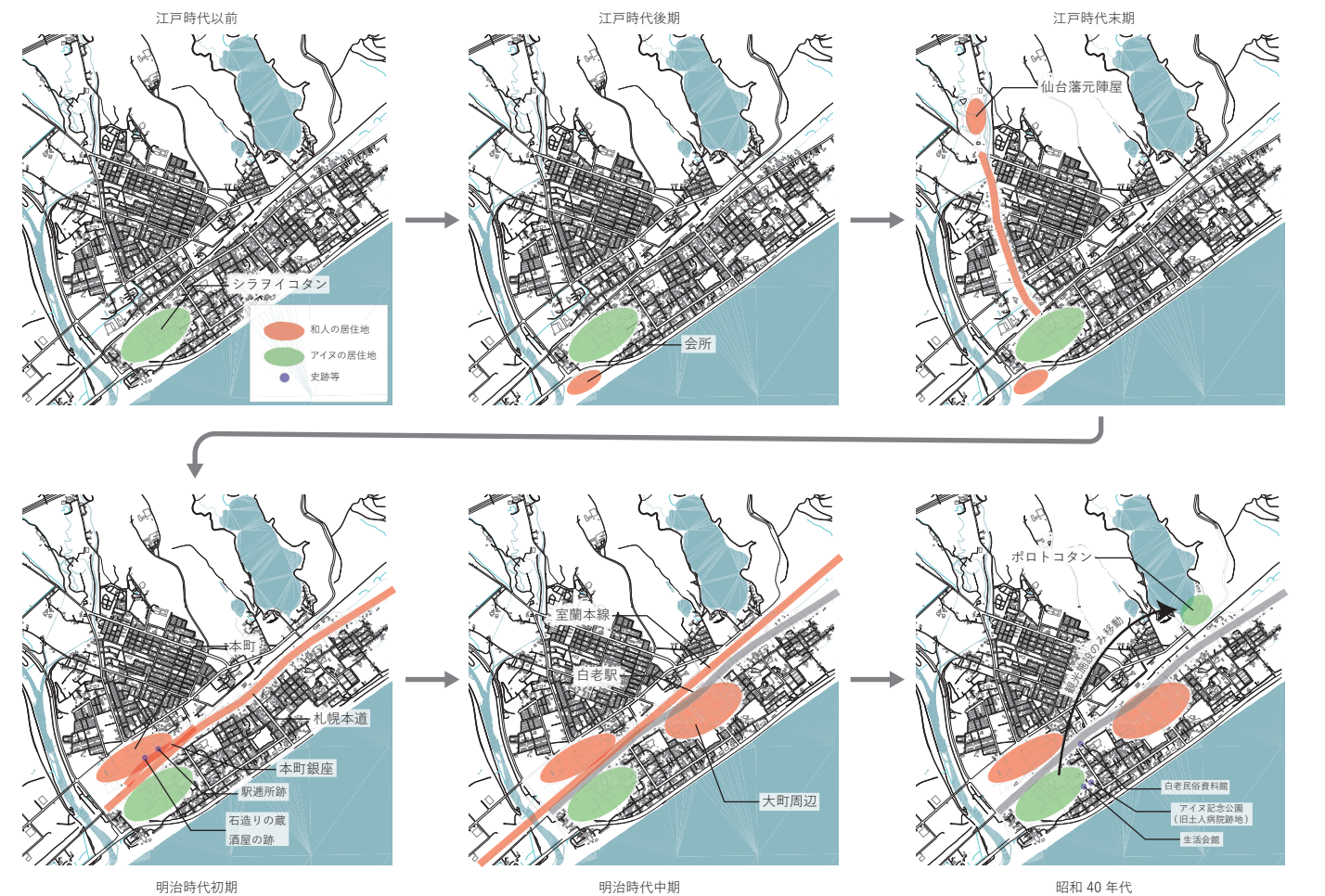


図6:白老の居住地・中心地の変遷

●本町

…蝦夷地に入るための交通の要所として、札幌本道・本町銀座が通り、駅通所が作られた。

●大町周辺

…室蘭本線や国道が通ったことにより、中心地が移動。白老駅を中心として栄えた。



図8:駅通所跡地にある明治天皇行在所碑

調査の結果、シラライコタンの場所が現在まで変化していないことが判明した。

第5章 考察

●互酬性の民族アイヌ

第1章を踏まえ、アイヌ民族が互酬性の原理を獲得することで、交易民でありながらも自然と共に生きる民族としてのアイヌが成立した可能性を示した。

●周辺・亜周辺・内地

第1章、第2章での文献精査を踏まえ、「内地」、「周辺」、「亜周辺」、「圏外」の定義に沿って、アイヌと日本社会との関係性を元にアイヌ文化期のアイヌ民族の変容を捉えた。

「エミシ」や「エゾ」といった北海道を指す言葉の移り変わりに注目し、日本社会からの認識・制度の両側面から、北海道の「周辺」化、「内地」化について考察した。その結果、認識の変化は

- ・エミシからエゾへの展開
- ・エゾから夷島への展開
- ・夷島から蝦夷地への展開
- ・蝦夷地から北海道への展開

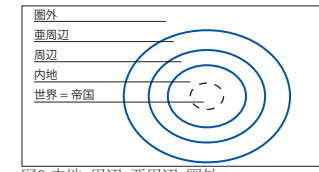


図9:内地・周辺・亜周辺・圏外

と変化していき、認識の上での「周辺」化、「内地」化が先立ち、そのあとに制度としての「周辺」化、「内地」化が起こったと考えることができる。

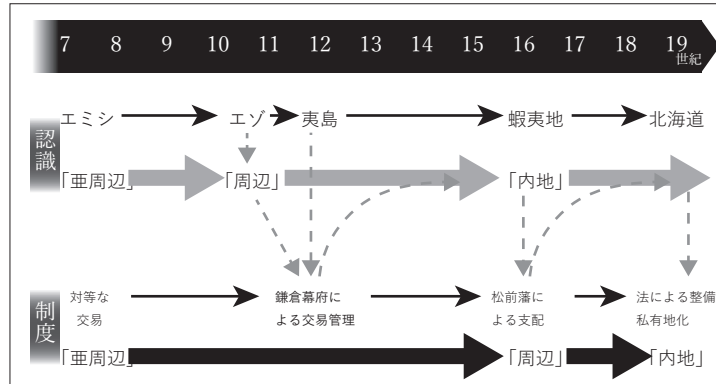


図10:認識と制度の北海道内地化プロセス

●白老の特異性

第1章から第3章までの文献調査と第4章での現地調査の結果を比較し、白老はコタンが強制移住を免れたという点で特異であることを示した。そして、シラライコタンが存続した直接的要因とそれを引き起こす根本的的要因について考察した。直接的要因は、江戸時代における生産力の増大と、明治時代における観光業という新たな生業の獲得であると分析した。また、根本的的要因については、立地・環境から規定される①産物・生業②交易③要塞④交通の4つの要素であることに言及した。

第6章 結論

白老ではアイヌも和人も、立地・環境から規定される①産物・生業②交易③要塞④交通の4つの要素によって居住地を展開する場所を決定されていることを示した。

古くからアイヌによって見出されていた土地が、和人にとっても利点となる立地条件が潜在的に揃っていたため、立地・環境の点でアイヌと和人の両方の利点を含んでおり、白老がアイヌと和人が共生するために適した場所であったことを明らかにした。そして、それぞれの要素が各時代で相互的に関係しあってできた現在の白老は、アイヌと和人が共に生きる中でかたちづくられてきた場所であると結論付けた。

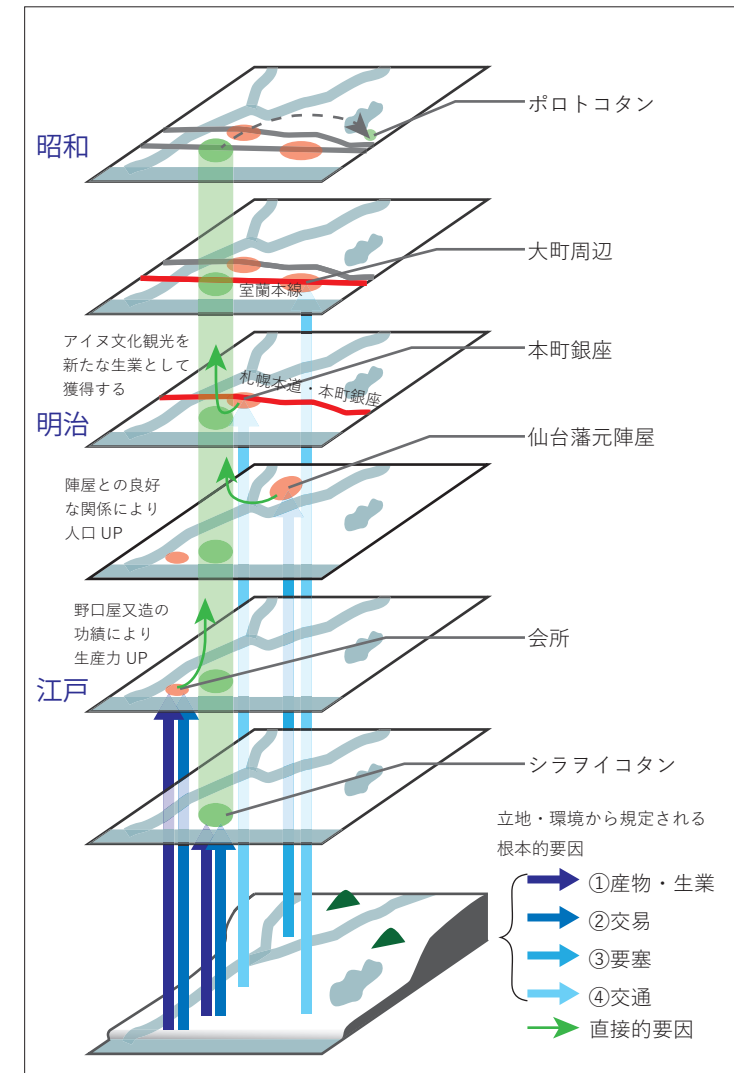


図11:シラライから白老への変遷と連続性

参考文献

- ・榎森進『アイヌ民族の歴史』(草風館,2007)
- ・ロバートG・フラーシェム、ヨシコN・フラーシェム『蝦夷地場所請負人-山田門左衛門家の活躍とその歴史-』(北海道出版企画センター,1994)
- ・養島栄紀『もの』と交易の古代北方史:奈良・平安日本と北海道・アイヌ』(勉誠出版,2015)
- ・榎森進、小口雅史、澤登寛聡編『エミシ・エゾ・アイヌ(アイヌ文化の成立と変容-交易と交流を中心として【上】)』(岩田書院,2008)
- ・白老町史編さん委員会『新白老町史』(白老町役場,1994)
- ・柄谷行『世界史の構造』(岩波書店,2015)

図版出典

- 図1:筆者作成
- 図2:筆者作成
- 図3:基盤地図情報をもとに筆者作成
- 図4:基盤地図情報をもとに筆者作成
- 図5:筆者撮影
- 図6:基盤地図情報をもとに筆者作成
- 図7:筆者撮影
- 図8:筆者作成
- 図9:筆者作成
- 図10:筆者作成
- 図11:筆者作成